

天からのパン

出エジプト記 16 : 2-4, 9-15

ヨハネによる福音書 6 : 24-35



司祭 ヨハネ 井田 泉

2024年8月4日

聖霊降臨後第11主日

上野聖ヨハネ教会にて

今日、聖霊降臨後第 11 主日の特祷でわたしたちはこう祈りました。

「どうかこの世において忠実に主に仕え、ひたすら主の約束を望み、ついにみ前に至ることができますように」

わたしたちを待っていてくださる神のみ前に至る。これが、わたしたちの人生の旅路の目的地です。

さて今日の旧約聖書は、出エジプトの民が、約束の地カナンを目指す旅の途中で、非常な困難に直面したことを語っていました。食べ物がなくなってきたのです。人々の不平は、指導者モーセとアロンに集中しました。

人々の不平を聞かれた神は、モーセにこう言われました。

「見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降^ふらせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。わたしは、彼らがわたしの指示どおりにするかどうかを試す。」

出エジプト記 16:4

それで何が起こったか。13 節から読んでみましょう。

「夕方になると、うずらが飛んで来て、宿営を覆い、朝には宿営の周りに露が降^おりた。この降りた露が蒸発すると、見よ、荒れ野の地表を覆って薄くて壊れやすいものが大地の霜のように薄く残っていた。イスラエルの人々はそれを見て、これは一体何だろうと、口々に言った。彼らはそれが何であるか

知らなかったからである。モーセは彼らに言った。『これこそ、
主があなたたちに食物^{しょくもつ}として与えられたパンである。』

16:13-15

朝、起きてみると、地面、地表一面を白く霜のようなものが薄く覆っていた。「これは一体何だろう」と人々は言いました。ここのヘブライ語原文を見ると、「マン フー」と読めます。「何か、これは」「マン フー」。それでその食べ物「マナ」と呼ばれるようになった、とも言われています。

神が民に毎朝マナを降らせて与えられた。そこには二つの意味があります。一つは、神の守り、養いです。神はマナを与えて、人々の命を保ち支えて、約束の地まで導こうとされる。

もう一つは、神による教育・訓練です。「民は出て行って、毎日必要な分だけ集める」と言われたように、マナは毎朝、その日の分をいただく。人々は毎朝、神の恵みを祈り求め、毎朝神の恵みを受けて、その経験を重ねていく。これによって信仰が、危機を乗り越える信仰が成長していきます。神が人々の信仰を育まれるのです。

神の守りも神の訓練も、いずれも神の愛から発しています。

不心得な人々がいました。二日分、三日分まとめて集めておいて楽をしようとする人がいた。ところが、集めておいたマナは翌日になると虫が付いて臭くなっていた（16:20）。

信仰にとって何が大切でしょうか。どのようにしてわたしたちの信仰は深まり、強められるのでしょうか。毎日、神さまとの交わりの時間を持つことをとおしてです。普段は忘れていて、必要になったときだけ神に求める、というのであれば、それは人間中心、自分中心であって、神さまを必要な時だけのお助け係にしてしまうことになる。そうではなくて、神さまが中心。この方に仕え従っていくところにこそ、信仰の平安と力と喜びが増し加えられていくのです。

かつて朝ごとにマナを降らせて人々を養われた神は、今わたしたちをも守り養い、また訓練していかれます。神はわたしたちを愛するがゆえに、そのようにわたしたちの信仰を育まれるのです。

遠い昔のマナの経験は、イスラエルの子孫に代々語り継がれてきました。それが今日の福音書につながっています。

このヨハネ福音書第6章24節以下は、イエスと人々の間に葛藤が生じている場面です。やり取りはだんだん厳しいものになってきています。人々はイエスにこう要求するのです。

「それでは、わたしたちが見てあなたを信じることができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいませか。わたしたちの先祖は、荒野でマンナを食べました。『天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです。」ヨハネ6:30-31

これに対してイエスは、今のあなたがたにも神が天からのまことのパンをお与えになる、と語られます。すると人々はイエスにこう求めました。

「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください。」 6:34

ここには二通りの人々がいるように思います。一方は、イエスの言葉に反発し、イエスを問い詰めてやろうとする人々です。もう一方は、ほんとうにイエスを愛し慕っていて、まだよくは分からなくても、天からのパンを、それによって生きて行くことのできる命のパンを、切にイエスに求めている人々です。実際、6章の後のほうを読むと、イエスに反発した弟子たちの多くがイエスから離れ去って行きました（6:66）。しかしわたしたちは、イエスのもとに留まろうとした人々と共に、次のイエスの言葉を聞きましょう。

「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」 6:35

イエスは「わたしが命のパンである」と言って、ご自身をわたしたちに差し出されます。

「わたしが」。この主語が、ギリシア語原文ではとても強調されています。ほかのだれでもない「わたし」イエスが、そうなのだ。

この世界にはおびただしい声が溢れています。しかし何より大切なのは、「わたしが」と言われるイエスです。イエスの声を聞きましょう。

「**(わたしが) 命のパンである**」。イエスのご自身を「命のパン」としてわたしたちに向かって差し出されます。わたしたちが、それによって生きていくことのできる（それなしには生きていくことができない）パンです。それを食べてこそ、命が保たれるばかりではなく、命が充溢します。

「命のパン」。イエスは2種類のパンを用意して下さいます。ひとつは、それはイエスの声、イエスの言葉です。人生の危機の中で恐怖に陥るわたしたちに言われる。

「**安心せよ。わたしだ**」(マルコ 6:50)。

イエスの言葉がわたしたちの命になります。それがわたしたちを支え救います。

「命のパン」。もうひとつは、聖餐のパンです。聖餐のパンは、物質という形をとおして、わたしの中に入り、わたしの命となるのです。イエスの愛がわたしの心に、そしてわたしの全身に浸透していきます。

祈ります。

わたしたちをみ言葉と聖餐という命のパンによって生かし養
ってくださる主が、わたしたちを導いて神のみ前に至らせてく
ださいように。アーメン